仮題　弥也子～美晴ヶ峰のお嬢様シリーズ塩野弥也子～

かとう みき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮題　弥也子～美晴ヶ峰のお嬢様シリーズ塩野弥也子～

【Ｎコード】
Ｎ１１００Ｚ

【作者名】
かとう　みき

【あらすじ】
姉の結婚は失敗だった。
いや、姉の態度が問題なのだ。
１０才の子供が冷静に観察して、ゆっくりと成長する。
反面教師の存在は確かに効果があり、少女は賢い結婚をしたが、恋心が介在すれば困惑する事ばかりだった。

子供時代長いです。
成長してからは、お約束的なプチハーレクイン目指しますｗｗ

猫被り姫終了後のメイン候補その２です。

◆1話◆反面教師

☆☆☆

姉の結婚は失敗だった。
ありがちな事だけれど、家柄と財産から選ばれた結び付きで、姉が愛された訳では無かったのだ。
とは云え、義兄も同じように思っているだろう。
お互い様だと。

私の見るところそうではない。
姉は確かに義兄を愛している。唯、自尊心が邪魔をして、素直になれないだけだ。
義兄の浮気に傷付いて、恨んで、それでも何も云わないのも、同じ理由からだろう。

端から見る限り冷えきった夫婦で、まさしく政略結婚の成れの果て、と云うに相応しい。
けれども私に云わせれば、彼らの失敗は政略結婚の所為ではなく、彼ら自身の行動の不味さだったと思う。
確かに、義兄は現在姉に対して愛情を抱いてはいない。どうひいき目に見たって、それは動かしようのない事実だろう。

でも当初は違う。彼は自分の妻になる女性に惹かれていた。そして彼女が恋人と引き裂かれて自分と結婚させられた事を知った時も、彼女の頑なさの事情が解ったと云って落ち込みはしたけれど、却って愛情は深まるようだった。情報提供者の私にフルーツパフェをご馳走してくれ乍ら、彼は云ったものだった。
彼女を幸せにしたい、と。

けれども人はいつ迄も待てないし、実家の権威を振りかざす妻の態度に、彼が疲れたのは仕方がない事だった。
月に一度か二度、美味しいお菓子や面白いゲームに依って買収され続けた私も、それに気付かない訳でも無かった。

そして、それはいつの間にか買収の意味を為さなくなった。

度々逢えば親しみも増して、彼は私を実の妹の様に可愛がる様になった。反比例する様に減ったのが、姉への愛情である。

彼が、他の女性に慰めを見出だす頃、姉は彼を愛する様になっていた。
皮肉な話だ。
内緒だと云い乍ら、月に2～3回しか逢わない義兄の話を、義兄と暮らす姉に尋ねられる。同じ様に、食事や服で釣られて、私は協力したものである。

如何な幼い私でも、彼らの行き違いの原因が、那辺に有るかくらいは理解した。

普通に云えば良いのに、と姉に云って。
姉は意地を張ってるだけだと、義兄に伝えた。

どうして二人共、心に思った事を云えないのだろう。
思ったままを云わないにしろ、お互いに満更でもないなら、優しい素振りひとつで、ずっと物事は変わってくるのに。

姉はどうしても素直になれなくて、義兄の心は益々離れた。そしてある日、姉は泣いて帰って来た。

私が十歳の時の話だ。

☆☆☆

何だか家の中が騒がしい気がして、私は寝台から起き出した。

時計を見れば１１時だった。

夜更かし好きの私だったけれど、その日は９時に就寝したから、寝過ごしたとしても午前中の筈もない。

それに、起こすなと云われない限り、日曜とは云えメイドは９時には声を掛ける。

やはり夜の１１時だろう。だが、この時間に相応しくない喧騒は何事だろうか？

何やら人が叫んでいる様な声が聞こえてきて、言葉は聞き取れない迄も、好奇心ですっかり目が醒めてしまった。

階下に降りると、声は更に明瞭になる。

居間の辺りかと見当をつけて向かえば、泣き声に近いそれが、姉のものと知れた。

「まあ。お嬢様……」

困惑混じりに、どうしようかと室内を伺う由紀に構わず、私は開いたままの扉を潜り抜けた。

「お嬢様。お起こししてしまいましたか……」

「ん。私にもお茶。」

若いメイドとは違い、私が生まれる前から家に居るフミ江は、直ぐに立ち直って横に立ち尽くす春加に頷いた。

「弥也子。」
「うん。」

近くまで行けば、姉は私を抱きしめた。
嗚咽に震え、しがみついてくる躯を何とか受け止め、私は宥める様に背中をさすり、腕を伸ばして髪を撫でた。
小さな子供みたいに、しがみついてくる姿は、常の姉とも思われず、私は溜息を零しそうになる。

「大丈夫。誰もね、此処では姉さんを悪く思う人も、傷付ける人も居ないの。大丈夫よ？」

母が生きていた頃、何かとよく泣いた私を慰めた台詞が口をついて出た。

「大丈夫よ。」

姉も、母に云われた覚えが有るのだろうか？しがみつく力が増した。
抱きしめられてるって体勢なのだろう。だが、しがみつかれているとしか云い難い、姉の様子だった。

「弥也子……もう駄目なの……」
「うん。」
「どうしてぇ？」
「うん。」

この場合、下手な事を云うと益々話は拗れるだろう。
私は本当に『何であんなに泣いたんだろう？』ってくらい良く泣いていた頃でさえ口の立つ子供だった。故に、泣きじゃくる相手が落ち着く迄は、とにかく逆らうべきではないと知っていた。

取り敢えず、今の姉は先程より大分増しな状態では有るらしい。
周囲の使用人達の、胸を撫で下ろす様子に、どれ程手が付けられなかったかを悟り、姉の事乍ら羞恥を覚えた。

フミ江に目配せをすると、心得た様に必要外の者を下がらせてくれた。

「姉さん。紅茶が来たみたいよ？暖かくして寝るのが良いよ。」

どんなに悔しい事も、哀しい事も、暖かい飲み物と睡眠を摂れば、大分気分は静まるものだ。

「寝れやしないわよ！」

そんなに簡単な事では無いと告げる態度にも、私はニッコリと笑った。
春加がうろたえるのを手で制して、お茶を催促する。

「うん。それじゃあ暖炉に火をいれて、此処でずっとお話しよう。」
「……」
「ね？」

もう一度笑いかけると、姉は頷いた。
私も、本当は執念深い性質だから、怒りの余りよく眠れない事が有る。

でも、いつかは眠くなる。
起きたらご飯食べて、学校行って、ご飯食べて眠って、繰り返してる内に、平気になる。
母が「その内に忘れちゃうわ♪」と云った台詞には、少しばかり裏切られたけれど、平気になったのは確かだ。

繰り返す内に、私は泣く事もしなくなった。
母が亡くなった時にも、同じ様にしてたら落ち着いたから、何が有っても大丈夫なのだと、今の私は思っている。

私の事を小生意気な子供(ガキ)だと云う大人も居るし、心の中で思っている人は多分もっと多いだろうが、私は構わない。
亡くなった母も、生きてる父も、義兄や姉、友達……かどうかは解らないけど、学校の何人ものクラスメート達が私を好きだと云うし、私も私を好きだから。

「久しぶりよね。こうして二人で起きてるの。」

パチパチと木屑が爆ぜる音に、気持ちが和む。
何杯目かの紅茶を、両手でカップを包む様にして、姉はこくりと飲んだ。何処か、子供みたいな仕草だった。

「お酒の方が良いかも…。」
「うぅ～ん。少しだけ……そうね、お茶にいれて飲むくらいなら。」

この人は私の姉で、２２才の年令よりも、本当はかなり大人びた女性である。少なくとも、周囲の評価はそうだった。
けれど、１０才の子供である私と共にいると、時に子供に戻る人だ。そんな時、私たちの立場は逆転する。
正確には、私は常にエラソーだったりするので、逆転と云うのは

違うかも知れないけれど……。

「春加、ブランディ持って来て。そしたらあなたも休んで良いわ。」

「ですが……」

姉の言葉に伺う様な視線が寄せられた。私が頷くと、安堵した様に首肯して下がる。

そんな春加の態度に、姉は少々拗ねた。

「普通、１０才の子供の命令を優先する？」

「今の姉さんよりはね。」

「ひどい。」

ぶつぶつと文句を云う。人前では限りなく高飛車な人だけど、我が家でだけは子供に還る。

思えば、その点では私も似た様な性格をしているので、気をつけねば為らない。

この人が泣いて帰って来たのは義兄の事だろう。また浮気の事か、でなくとも余計な事を一言も二言も口にして、止まらなかったに違いあるまい。

この点、物凄く理解出来る。

云い過ぎだと心で思うのに停止出来ない事はよく有る。

私は男の子をよく泣かせた。

もう止めなきゃと思っても、見下した視線もそのままに、やり込めて踏みにじって、相手が泣いて逃げ帰る迄停まらないのだ。

その所為でしょっちゅう落ち込んだが、代わりに負けて泣かされるよりは余程増しだと開き直ったりもしたものである。

泣くのは、本当は凄く嫌いだった。
誰に云われずとも知っている。私は負けず嫌いだ。
小学校に上がったばかりの頃は、まだ泣き虫が残っていたが、それも負けず嫌いが原因の悔し泣きだった。
おまけに私は、女の子を泣かせるのは楽しくないが、男の子なら……いや、好きな男の子ならば、……むちゃくちゃ好きなのだ。いや、だから泣かせるのが。と云うより虐めるのが。

我乍ら困ったものだ。
しかし、自分で云うのもどうかと思うが、やはり私は美少女なのだと実感せずにおれない。彼らは泣かされても泣かされても、私に近付こうとする。
大体がして、最初に私に喧嘩を売って来るのも、好きな子ほど虐めたい子供心理のタマモノで、たまたま私がこういう性格だから虐め返してしまっただけの事なのである。
しかし……だ。
最近の私は考える。

このままではヤバイ。

いつか、私が姉の轍を踏まない保証は無い。
美貌だけで世の中が渡れないのは、姉を見れば火を見るより明らかだった。
おまけに、私の姉だけあって、この人は知性まで有するのに、失敗した。
いや。
今からでも素直に成ればやり直せるかも知れないのに、今更出来ないのだ。
自尊心の高さ故に。

私には理解出来ない事も有るけれど、それは違う人間だから仕方ない。
問題は。
姉の態度に、自分の未来が垣間見える瞬間だった。
よく母も云っていたではないか。
「本当は、泣いた方が得な事も多いのよ？」
姉は泣けない。
今日だって、義兄の前では泣けなかっただろう。
それでは意味がない。
私にだって理解出来る理屈だ。
「姉さん。義兄さんに謝った方が……」
この女は、けれど私とは違う。
将来の不安を抱える妹を前に、誰の所為で此処に居ると思っているのか、安らかに眠れたりするのである。
「謝った方が、絶対自分の為よね。損して得取れって父さんが云うけど、本当にそうだと思うわ。」
嘆息して、私は執事の山本を呼ぶ為に、内線を繋いだ。
☆☆☆

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1100z/

仮題　弥也子～美晴ヶ峰のお嬢様シリーズ塩野弥也子～

2011年12月4日01時48分発行